

# 本学所蔵「ルイ 16 世様式椅子セット」の検証と修復

齊藤昌子

## 1. はじめに

本学所蔵「ルイ 16 世様式椅子セット」は 2000 年（平成 12 年）に大和証券グループから教育、研究用資料として、本学に寄贈された一人掛け椅子 6 脚、3 人掛け長椅子 1 脚の計 7 脚からなる椅子セットである。

この椅子セットは寄贈時に既に著しく劣化していたため、2001、2002 年度の総合文化研究所プロジェクトとして、美術史的立場からの調査と、素材、技法についての科学的分析、および一人掛け椅子 3 脚（椅子番号 No. 1, 4, 6）と 3 人掛け長椅子の 4 脚についての修復を行った<sup>1)</sup>。

本プロジェクトは、2001、2002 年度に修復できなかった椅子 3 脚（椅子番号 No. 2, 3, 5）についての修復を行うことを目的としたものである。本プロジェクトでは、修復から 10 年が経過している 4 脚の椅子についての現状を調べ、前回の修復処理の妥当性について検証を行った後、修復を行った。調査、検証作業には前回の修復を担当された森 純一氏（国立台湾芸術大学客員教授）に加わっていただき、修復作業は同氏に依頼した。

この椅子セットの由来、寄贈時の状態の詳細については、筆者ら<sup>1)</sup>の報告にあるので、ここでは省略する。

## 2. 2001、2002 年度修復椅子の現状調査と検証

2001、2002 年に修復処理を行った 4 脚の椅子の、10 年経過後の変化と現状を 2011 年 7 月 18 日に八王子校舎収蔵庫において調査した。木質部の金箔部分の修復直後から現在までの変化は、修復当時に予測した範囲のもので、落ち着いた色合いへの変化をもたらしており、前回の修復処理の妥当性が確認された（写真 1）。このことから、今回の修復も前回と同じ修理仕様によって作業を進めることとした。

タペストリー部分については、既に前回で調査、分析、記録、清掃処理が終了しており、その後の変化は見られないことから、今回は特に作業は行わなかった。

## 3. 修復方針

今回修復を行う椅子の現状について述べる。各椅子の構造材木部に施された金飾には、13 年前の寄贈元から本学への移動時に応急的な剝落止めの処理が行われているが、椅子番号 No. 3、No. 5 は木の収縮と金箔下地の経年変化による金箔層の劣化が著しく、部分的に木地から浮いた状態にあり、破断箇所は外に反った形状を呈している（写真 2）。椅子番号 No. 2 は、後年に同様の技法によって復元処理がなされており、損傷は軽度である。

以上の現状を踏まえ、今回の修復は下記の方針で行うこととした。

修復、保存の基本は、剥落留め、欠損部分の補填、金箔層を閉じることである。これに従い、実際の作業は、再度の剥落止めの処置、欠損部分の補填、金箔層を閉じる作業を行う。作業には、可逆性のある素材を使用し、修復箇所を認識できるようにする、さらに修復材料が周辺のオリジナルの金箔層に影響を与えることのないように、使用するメジウムの凝集力を弱く調整して行う。作業は、湿度 55% 前後の環境に保持し、補填金箔層の成型は積層ごとに膠濃度を調節してオリジナル層に負荷をかけないように行う。

#### 4. 修復作業

修復作業は 2011 年 8 月 22 日～11 月 8 日、神田校舎本館 912 実験室で、森氏によって行われた。

①タペストリー部分を保護し、銚と鉄釘に生成した錆を除去した後、ベンゾトリアゾールを添加したアクリル樹脂 Paraloid を塗布含浸することによって防錆した。

部材の連結部分には、鉄釘や埋め木が使われ、木材の収縮や錆の膨張によって金箔層を破壊する（写真 3-1）。樹脂を注入して防錆処理を行った（写真 3-2, 3-3）。

銚の鉄部分は鉄製で、和釘同様に 4 面にカットされ抜けにくくなっており、木部に深く錆びいていたので、鉄錆を除去した（写真 4, 5）。朽損した銚は新しい銚を補った（写真 6-1, 6-2）。

②剥落箇所の金箔層断面からアクリル樹脂 Paraloid B の 72.6% 溶液を含浸し、剥落を止めた。

また下地層が浮き上がって変形している部分には、溶液で柔軟性を与え、少し熱をかけながら素地に収めた（写真 7-1, 7-2）。

③剥落部にポローニャ石膏（二水和石膏）を膠で溶き、3 回ほど塗り重ねた後に、下地面を整えた（写真 8-1～8-5）。

④下地を補填した後、赤ポーロ（箔下砥の粉）を施し、磨り整えた（写真 9-1～9-3）。（素材・技法はオリジナルと同様とするが、補修部分はオリジナル面より若干低くし、膠は日本の風土に合った和膠を使用した。）

⑤ドーサ液を用いてギルディングを行った。

⑥オリジナルの金箔部分をエタノールとクエン酸水溶液でクリーニングし、新補の金箔部分については色味を調整するために淡くステイン着けを行った（写真 10）。

⑦以上で修復処理を終了した（写真 11）。

作業に要した総時間数は 208 時間であった。

#### 5. まとめ

椅子番号 No. 2, 3, 5 の 3 脚の椅子の修復処理により、「ルイ 16 世様式椅子セット」7 脚全ての椅

子の修復が完了した。

1800～1850年頃にフランスで製織されたタペストリーで作られたこの「ルイ16世様式椅子セット」は、数回の大掛かりな修復が行われ、1878年（修復に使用されていた最も新しい合成染料の製造年）～1916年（松方幸次郎氏が蒐集を開始した年）の38年の間に、現在の木枠に取り付けられた<sup>1)</sup>。現在の椅子の様式は、1850～1900年頃にルイ16世様式のリバイバルとして流行した「ナポレオン3世様式」である。この椅子セットは、川崎造船社長であった松方幸次郎氏によって蒐集され、旧松方コレクションの一部として日本に搬送された。その後、1930年の世界恐慌と業績不振で川崎造船は債務不履行に陥り、旧大和証券の前身である藤本ビルブローカー銀行に担保として確保され、以来2000年迄大和証券グループに所有されたものである<sup>1)</sup>。

2000年4月に共立女子学園に寄贈された椅子セットは、2001、2002年に4脚の椅子が、今回残りの3脚が修復され、7脚全ての椅子の修復が完了した。

現在、椅子の主要なタペストリー部分は製織当時の図柄を残しており、修復された部分は繰り返し行われた修復の技法が分かる貴重な資料となっている。木質部は、剝離していた金箔層が閉じられたことによって、劣化の進行が止められ、今後の保存・管理、展示に支障のない状態となった。

誕生から約200年経過したこの椅子セットは、この12年間に多くの人の手によって美しくよみがえり、同時に大きな社会的貢献を果たしてきている。いま新しいステージを迎え、これからも多くの人を魅了していくと考える。

## 謝辞

この椅子セットを寄贈された大和証券グループに感謝の意を表します。前回の修復プロジェクトにご参加いただきました、現メトロポリタン美術館終身名誉館員 梶谷宣子氏、現東京芸術大学名誉教授 長澤市郎氏、染織品修復士 石井美恵氏、本学名誉教授 故齊藤顕治氏、元本学助手 霜鳥真意子さん、笠作奈樹さん、修復作業に携わられた東京芸術大学大学院生、本学被服学科大学院生、卒論生、そして前回と今回の修復作業を担当された森 純一氏に心から感謝の意を表します。

1) 齊藤(昌)、霜鳥、笠作、石井、梶谷、長澤、齊藤(顕)、共立女子大学 総合文化研究所紀要、第10号、pp 51-64、2004



写真1. 前回（10年前）の修理椅子の現状



写真2. No.5 金箔層剝落の現状

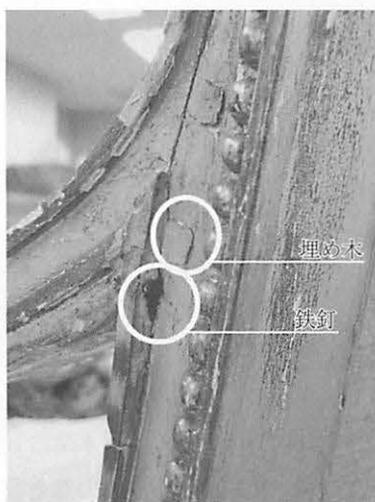


写真3-1. 連結部分に使われた埋め木と鉄釘



写真3-2. 鉄錆除去と樹脂注入（防錆処置/B.T.A添加）

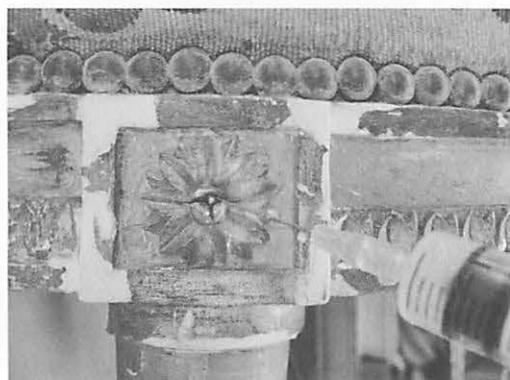


写真3-3. 鉄錆除去と樹脂注入（防錆処置/B.T.A添加）



写真4. 真鍮製の鉾に生成した錆の除去



写真5. 新補の鉾と錆付け、朽損した鉾 (右)

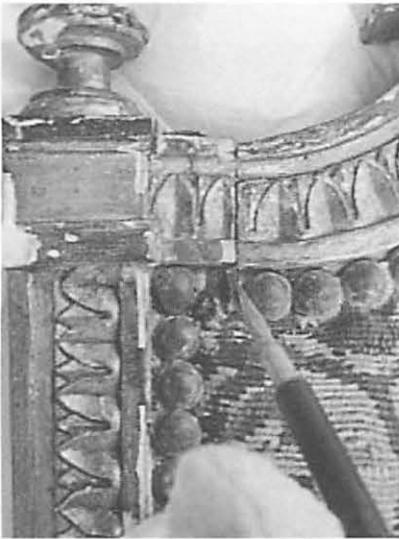


写真6-1. 鉾の新補

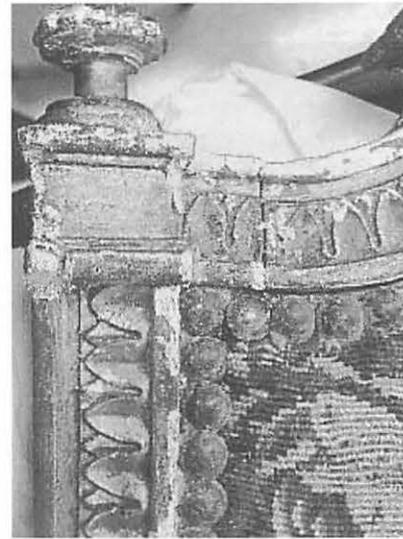


写真6-2. 鉾の新補



写真7-1. 剝落止め



写真7-2. 剝落止め



写真8-1. 下地の調整

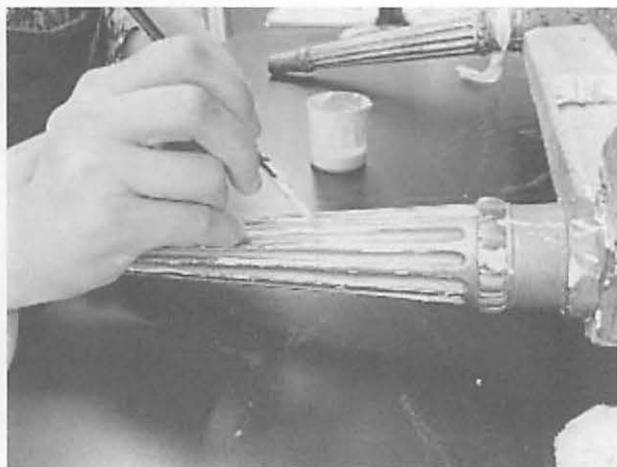


写真8-2. 下地の調整



写真8-3. 下地の調整

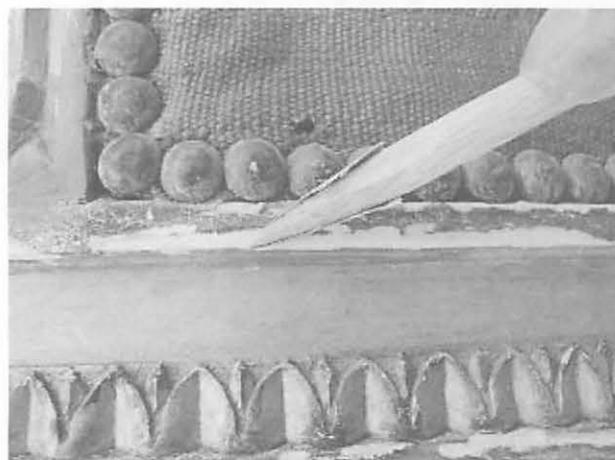


写真8-4. 下地の調整



写真8-5. プラスター下地の終了

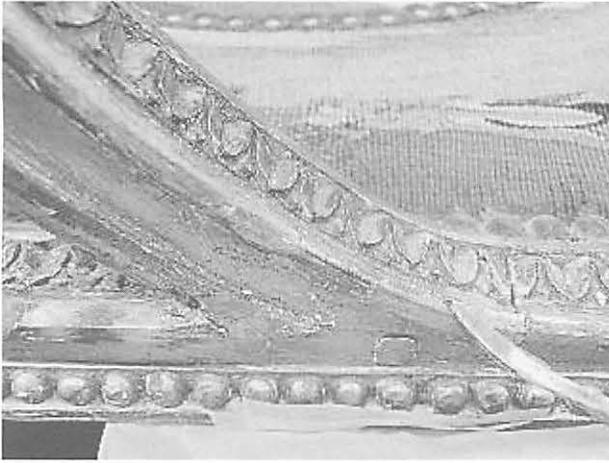


写真9-1. ボーロ面の磨り



写真9-2. ボーロ面の磨り



写真9-3. 補修部下地の完了



写真10. 金箔部分のクリーニング



写真11. 修復完了